



# ボストン留学記

宮本眞弓

平成6年卒  
(旧姓尾上)



東京歯科大学を卒業後、補綴第三講座に所属し専修科修了。千葉病院補綴科病院助手、水道橋病院補綴科病院助手を経て、97年9月に留学準備に入り渡米。98年2月よりアメリカ、ボストンで留学開始。現在はボストン大学で診療と教育に携わり、ボストン日本祭りの実行委員、フードブースのチームリーダー。



- ① ボストンの街並み
- ② ボストン大学歯学部

まず始めに、当時、補綴科の安達 康先生に留学の相談の際、快く見送っていただいたことに感謝いたします。そして、ボストン大学歯学部補綴科在学中には東京歯科大学スキー部OBでもいらっしゃる、山本英夫先生にご教授いただき、感謝いたしております。ボストンで暮らして感じたことに、東京歯科大学出身の先生が思ったよりも多くいらっしゃったので、当初はとても心強かったです。毎年年始には、歯科関係者の集まりがあり、東京歯科大学ボストン支部同窓会（実在しません。笑）のようになります。日本を離れて早24年が経ち、もう少しでアメリカ生活の長さが日本での長さを逆転します。文章のおかしいところは笑ってお許してください。

私の住むアメリカ、マサチューセッツ州は、北海道、釧路市とほぼ同じ緯度に在ります。春秋は一瞬で過ぎ、夏は短く冬は長い。そのような地で24年以上過ごしております。イギリス植民地時代の街づくりが残っているところが多く、街や道路の名前の由来はイギ



リスからのものも多く、アメリカにいながらにしてイギリスを強く感じる場所でもあります。夏は日本と比べると湿気が少ないので、避暑地のような気候です。日本のような四季を感じ過ごせる場所なので、この地に移住しても楽なのだと思います。以前は美味しい日本食を求めてニューヨークまで行っておりましたが、ここ5年でわざわざ遠くまで行かなくても日本の物は簡単に手に入るようになりました。美味しい日本食のレストランも増えたので、今は日本人にとって、とても住みやすい環境です。

ここからは、私が留学に至った



③ 水道橋病院補綴科送別会  
④ 仲良し同級生・先輩・後輩からの送別



経緯をお話いたします。

卒業後の専修科では、補綴第三講座、故・関根 弘教授、岸 正孝教授の元でお世話になりました。専修科修了後は病院助手になり、3年目の96年に千葉病院から水道橋病院へ異動。スキー部で親しい他校の友人が、ハーバード大学で留学を始めたので、96年にボストンで開催された学会に参加しました。その際、ハーバード大学とボストン大学の歯学部を見学させてもらいました。同窓の河原拓也先生（ハーバード大学、総合歯科+公衆衛生学卒）にも久しぶりにお会いしたのを覚えています。見学させていただいたのは共に補綴科で、卒業後まもない学

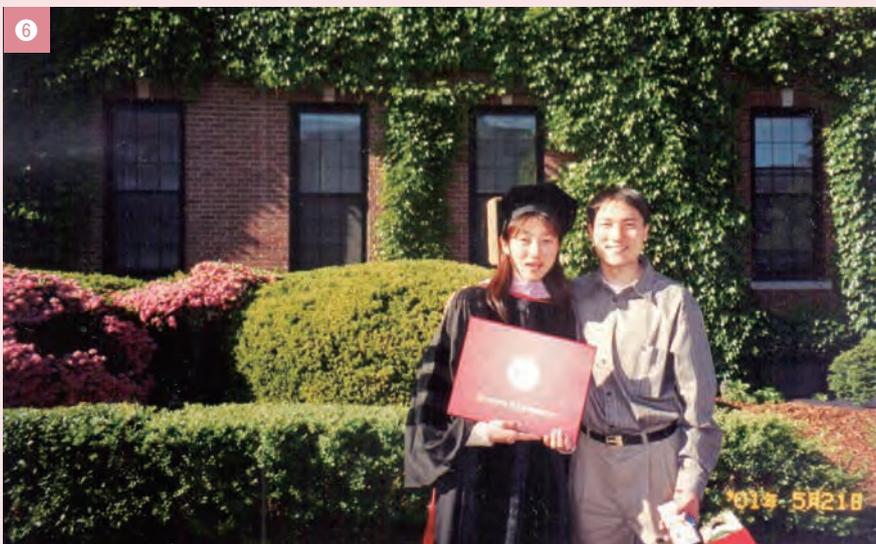
生が、当たり前のように様々なインプラント治療を含めた難症例をこなしていることに衝撃を受けました。ラボの机上に無造作に並んでいる症例等を見て、「このまま日本でやっていくより、アメリカに来て色々な経験を積みたい！」という思いが強くなり、留学を決意しました。今となっては日常ですが、当時はインプラントの症例は大学院生にしか回ってこなかったの、専修科生の私にとっては、遥か遠くの臨床ケースだったのです。

既にボストン大学にいらした武居 純先生（平成5年卒）にボストンの学会でお会いした際、「留学したかったら、まずは英

語。本気で考えているのならまずはアメリカの英語学校に入らないと！日本で英語の勉強していたら、留学は実現しないよ！」と言われ、フツフツと沸いていた留学魂に火がつき、現地の英語学校の書類を集め、ボストン大学の願書提出、VISA手続き、と同時に親を説得。補綴が得意な父は東歯昭和36年卒。将来、父の診療所で一緒に仕事ができる時に、補綴専門医は役に立つだろう、と快諾してもらいました（が、約束破ってごめんなさい。アメリカに永住することになるとは、当時は思いもしなかった…）。

話は戻りまして、実は私、英語は大の苦手教科でして、教養課程ではいつもギリギリ。99年度のボストン大学補綴科に合格はしたものの、英語力、特に進みの早い授業についていくことにまだ自信がなかったので、1年遅らせて次年度の入学を目指すことにしました。その間は日本に帰らず、ハーバード大学やボストン大学等で、若い学生に混じり英語の勉強。後に、この時期に築いた人間関係が一生ものになります。簡単に言えば、この時期に夫に出会ってしまいました（笑）。

もう一度ボストン大学歯学部の多種あるプログラムを見直し、まずはAdvanced Education of General Dentistryという、1年間のプログラムに入学することにしました。診療は9時から19時までで、朝と夕方は座学の授業でした。一通りの治療（口腔外科、老年歯科、歯周、インプラント、補綴、歯内などの専門、矯正、放射線）を経験するので、そこで本当



5 ポストン大学 AEGD 6 ポストン大学卒業式 夫, David と

に自分が補綴専門医を目指したいということをこの1年間で再確認しました。

やはり自分は補綴をもっと勉強したいということを確認できたので、再度補綴科志望者の面接を受けました。2月に合格通知が届き、2001年7月から2004年6月までの3年間は、アメリカの補綴専門医になるために、診療と座学の授業に加え、夜中までの技工、論文のレビュー等に追われる毎日でした。技工は補綴に関する一通りのことは全て自分でできるように

なるので、応用力もここで身につきました。厳しい学生生活の中での楽しい思い出は、ラボ（学生技工室）での日々です。留学生は様々な国からで、韓国、台湾、ブラジル、インド、ギリシャ、ベネズエラ、そしてレバノン等。先輩後輩みんな夕飯。大抵近くのレストランに食べに行ったり、ピザのデリバリー等で夕飯しおしゃべり。手を動かしつつ、各国語でキャンディキャンディの主題歌を熱唱したり、各

国の悪い言葉を教え合い（笑）。毎週、教授とクラスメートとで行われる論文のレビューでは、自分の番が何時回ってくるのかわからないので、常に緊張していました。いつまで経っても人前での発表は慣れません。当時Zoomがあれば、なんと心強かったことでしょう。

在学中、一番緊張して達成感があったものは、2年次に全科合同で行われる Ground Round という症例検討会でした。100人近くの学生や教授たちの前の大教室で、スライドを使っての発表と質疑応答があります。そのための準備に総力を注ぎ、終わった後の達成感は今でも忘れません。でも、2度としたくないことの1つです。Power Point もまだ出始めた頃で、20年前のあの頃はなぜか、“パソコンを使って、楽するのは悪”みたいな風潮がありなかなか使えず。時代は変わりましたね。

卒業後は、ボストン大学で歯学部の学生を教えながら、地域の歯科診療所で第1子誕生2006年までフルタイムで働きました。第2子誕生前に、大学勤務のみに

7 学会にて同級生に再会





8 ポストン大学歯学部 Pre-Doc Faculties

変え、ファカルティ診療1日、学生教育3日の週4日フルタイム勤務で、今に至ります。2014年には歯学部3年生の臨床に関わるコースを受け持つことになり、そちらも年間通してのコースで、今も常

に忙しくしております。

留学したての頃は、まさか自分がアメリカに永住するなんて思いもしなかったのですが、住めば都。こちらのライフスタイルが私

には合っているようです。ホームシックにもならずここまで来たのは、いつも気にかけてくれる友達や先輩方がいたことだと思います。

日本には数年に1度のペースで帰国していましたが、同級生の山本雅通先生ご家族、大山貴司・晃代先生ご家族、鬼頭仁美先生ご家族、スキー部の先輩、喜田賢司先生とご家族には毎回帰国の度にお声を掛けていただき、家族ぐるみでお付き合いさせていただき、とても感謝しております。

最後になりますが、もし留学を迷っていらっしゃる先生がいらっしゃいましたら、お気軽にお声がけください。お力になれば嬉しいです。



9 家族で。コロラド州 Vail スキー場